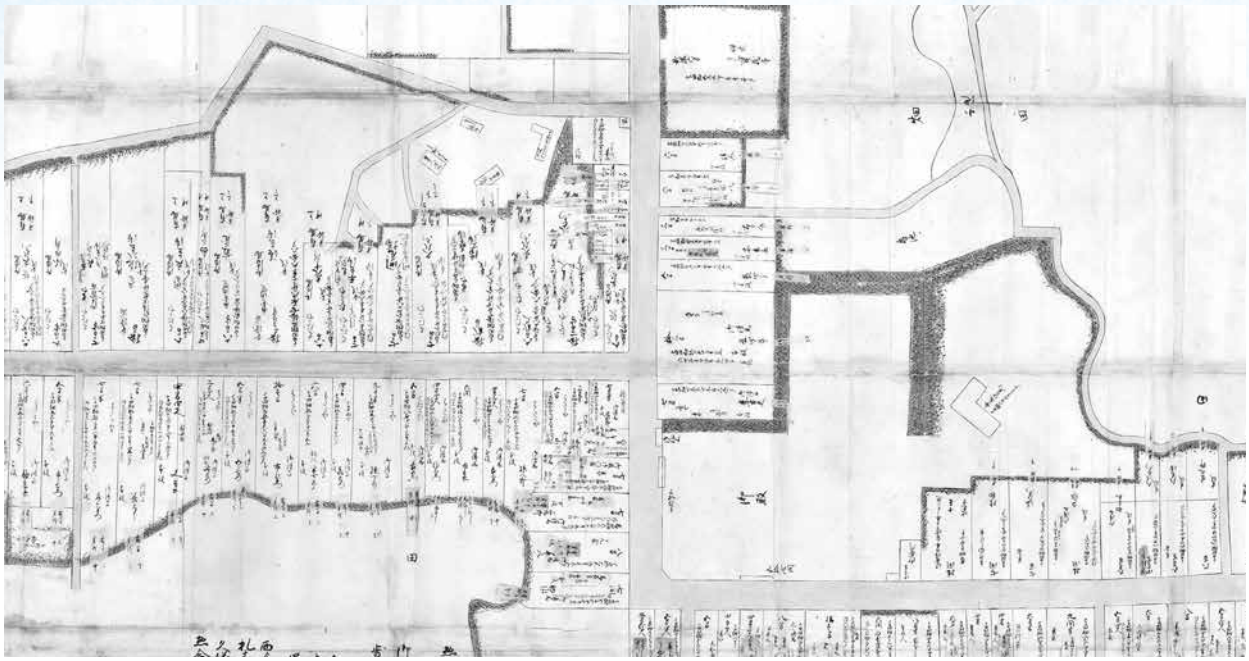
新編 知立市史だより

第９号



東海道池鯉鮒宿宿並図〔部分〕（知立市歴史民俗資料館所蔵）

江戸時代の知立は東海道の宿場町として栄え、多くの人々が往来していました。その池鯉鮒宿に関する新出史料が、２点明らかになりました。１点は、「東海道池鯉鮒宿宿並図（しゅくなみず）」（上写真）です。本図はこれまで存在が知られていた国立歴史民俗博物館所蔵のものと、ほぼ同じ内容を描いた絵図です。もう１点は、池鯉鮒宿の本陣（永田清兵衛家）の利用記録である「池鯉鮒宿本陣御宿帳（おんやどちょう）」で、知立市歴史民俗資料館所蔵の８冊とは異なる１冊が見つかりました（４～５ページ参照）。
これらの史料から、池鯉鮒宿の新たなことがわかってきます。

知立市

2018.10.16

資料編「近世」「自然」、刊行!!

『新編知立市史4　資料編　近世』

資料編「近世」は、江戸時代の知立市域の様子について知ることのできる資料集です。付録のCD―ROMには、池鯉鮒宿や村などの景観を描いた絵図史料の画像データを一五点収録しています。

【目次】

第一章：池鯉鮒宿　第二章：領主
第三章：村　第四章：文化・文芸
付　録：CD―ROM

『新編知立市史8　資料編　自然』

資料編「自然」は、本市初の本格的な自然分野に関する刊行物であり、写真や図をオールカラーで掲載しています。本編のほかに、市内で確認された植物・動物の詳細な情報を記載した『植物・動物目録』を付録としました。

【目次】

第Ⅰ章：地形と地質　第Ⅱ章：気候
第Ⅲ章：植物　第Ⅳ章：動物
付　録：『植物・動物目録』

刊行記念講演会を開催しました

新編知立市史第五回配本となる資料編「近世」「自然」の刊行を記念して、七月二十一日に知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）において講演会を開催しました。

講師は、近世部会長の池内敏先生と自然部会長の大和田道雄先生です。先生方はそれぞれパワーポイントを使用し、わかりやすい講演をしてくださいました。

■講師

・池内　敏　氏（近世部会長　名古屋大学教授）
「知立市域の江戸時代」
・大和田道雄氏（自然部会長　愛知教育大学名誉教授）
「身近な地域の気候を知ろう―知立市の気候環境―」

また、刊行記念講演会と同時開催で、昆虫標本のミニ展示を行いました。世界のカブトムシやクワガタ、美しいチョウ、知立市で採集した昆虫などの標本を展示し、見に来てくれた子どもたちをはじめ大人の方々にも楽しんでいただきました。解説をしてくださった自然部会の山崎隆弘先生に質問をする方も多く、皆さん熱心に山崎先生のお話を聞いていました。ちりゅっぴも遊びに来ました。

■標本提供及び解説

・山崎隆弘氏（三河昆虫研究会副会長）

講演内容

■「知立市域の江戸時代」

池内　敏

近世資料編としては先に「池鯉鮒宿本陣御宿帳」を刊行し、今回の資料編「近世」でも未知の発見があり、たくさん勉強させていただきました。ご協力を賜った市民の皆様に感謝する次第です。

今に伝わる知立神社祭礼が江戸時代の陽祭・陰祭の隔年交替などに由来すること、知立神社が雨乞の神様として他の追随を許さぬご利益をもたらしたこと、また、江戸時代とは武士による恣意と暴力がまかり通った時代であるかのごとき印象すらありましたが、刈谷藩の譜代大名たちは、いつも先代大名たちの支配を引き継ぎながら均質で客観的な支配に努めた様子が明らかとなりました。

とはいっても、江戸時代には現代とは異なる常識・規範がありました。村や町などで庄屋・組頭などを選出する際は現在と同様な選挙（入札）によりましたが、入札という制度それ自体は客観的で冷静な制度ではありませんでした。また、資料編「近世」に収めた享保十四年（一七二九）池鯉鮒町と牛田村の境争論は、文書と絵図の双方が残された貴重な史料ですが、論拠が怪しく極めて不合理な裁定が当時の人々にとっては合理的だったとわかります。

今回新たにわかったことと同時に、ますますわからなくなったことも少なくありません。それは歴史を学びゆく際にとても刺激的でわくわくする経験です。

■「身近な地域の気候を知ろう―知立市の気候環境―」

大和田道雄

地球温暖化による異常気象が多発しています。これは、熱帯海域の海面温度上昇によって亜熱帯（中緯度）高圧帯の勢力が増してきたからです。このため、温帯地域のわが国では亜熱帯化して猛暑や集中豪雨、竜巻なども発生するようになりました。南高北低の夏型気圧配置の出現頻度が増し、東海地方は高気圧の縁に沿う南西風が伊吹山地や鈴鹿山脈を越えてフェーン現象となり、わが国でも有数な猛暑地域になりました。知立市もその例外ではありません。夏季の最高気温出現時には三七度を上回る暑さとなり、夜間でも二九度の熱帯夜になることも少なくありません。特に、伊勢湾と三河湾からの風が収束する境川不連続線では集中豪雨が発生しやすい特徴があります。東西わずか四kmの知立市ですが、猛暑時の不快指数は知立南と知立東小学校区で蒸し暑く、知立西と猿渡小学校区では夜間の熱中症に対する注意が必要です。また、冬季には北西の「伊吹おろし」の風道にあたり、身体で感じる寒さ（酷寒指数）で比較すると、知立西、知立東、知立南小学校区では北海道の網走に匹敵する寒さを体感していることになります。これらの体感指数の平均では、知立西、知立、知立南小学校区に比較して来迎寺、および八ツ田小学校区が相対的に恵まれているようです。

新たに見つかった「池鯉鮒宿本陣御宿帳」

「池鯉鮒宿本陣御宿帳」は本陣（永田清兵衛家）の利用記録で、知立市歴史民俗資料館所蔵の八冊が、『新編知立市史５　池鯉鮒宿本陣御宿帳』に全文翻刻されています。今回新たに塩村耕氏（名古屋大学大学院教授）所蔵の一冊の存在が明らかになりました。宿帳の空白部分を補うものとして貴重です。今回新たに見つかった一冊は、添えられた書簡によると、愛知教育大学名誉教授の大礒義雄氏が名古屋の古書店より購入し、塩村氏に贈られたものであることがわかります。宿帳を見いだされた大礒氏、さらにその存在の情報を提供いただいた塩村氏に敬意を表します。

今回新たに見いだされた一冊は、記述の様式と体裁は、既存の八冊に準じています。表紙には「御宿帳」とあり（写真①）、また、本文冒頭には「八番目」とあり、続いて元禄十三年（一七〇〇）から宝永三年（一七〇六）まで七年間の年号と干支を記します。この記述から本冊が七年間の本陣利用について記録したものであることがうかがわれます。残念ながら記録は元禄十三年正月から始まり同十七年十一月までで、以下が欠損しています。五年間ほどの記述であり、丁数にして五六枚ほどです。

写真①（表紙）

本文冒頭の部分に記された「八番目」というのは、本冊が永田本陣で作成された宿帳の八番目にあたることを示しています。現存する宿帳八冊には、冒頭のほか、表紙・裏表紙などに番号が振られています。その番号を記すと、三、四、五、六、九、拾三、拾四、拾六、です。番号に欠番があり、今回の一冊がこの欠番を埋める一部であることがわかります。今後、欠番の宿帳が発見される可能性があります。

「池鯉鮒宿本陣御宿帳」の概要については、『新編知立市史５　池鯉鮒宿本陣御宿帳』に詳細な解説があるので参照していただきたいと思います。新たに見いだされた一冊も日付・利用者名・宿泊か休息の区分・拝領金額などを記すことに変わりありません。記述は簡略的なものですが、そこには「御入部」「二條御番頭」「大坂御城番」「御加番」などの書き込みがあり、利用者の旅行目的がわかるものがあります。一例を挙げてみようと思います。元禄十四年四月には次のように記される部分があります（写真②）。

四月九日　召四十弐人
阿部志摩守様　御休　金壱分
二條御番頭　山岡五兵衛殿
四月十五日　召廿人
池田帯刀様　御休　金壱分
同断　中村清蔵殿
四月十六日　召宵ニ十人
成瀬隼人正様　御休　金弐分

阿部正明は幕府の大番頭役、池田長清も大番頭役を勤めるもので、二条城警衛での「御休」利用であることがわかります。二条

写真②（元禄十四年四月の記録）

城の大番役は一年交替になりますが、交替時期は四月です。「召四十弐人」「召廿人」の、「召」というのは、飯を召すということで「飯」を意味するとみられます。召し人数は引率する家来人数にもなります。「召」の記載は「御休」「御泊」にあり、「御通」や「御入」にはありません。おそらく、昼休憩のときにとる弁当を指すのだと思われます。尾張藩の成瀬正親では「召宵ニ十人」とあり、宵のときのものであることがわかります。「召」について、「召なし」とするものもあります。

このほか、本冊には元禄十五年時における刈谷城主稲垣氏の転封にかかわる役人の宿泊記述があります。稲垣氏から阿部氏へ刈谷城の引き渡しにおける両大名家の家老などの宿泊に関する記録です。城引き渡しは十一月二十八日に行われ、転封となった稲垣氏の家老山本唯右衛門については、引き渡しが済むまで本陣に妻子ともども逗留していることが書き込まれています。池鯉鮒宿は刈谷藩領であり、その領主の動向は本陣役を勤める永田氏にとって関心が高いものであったのです。

本陣利用の特殊な例では、亡くなった大名の遺骸移送があります。元禄十三年十月二日には「松平土佐守様御遺骸」とあり、同年九月十四日に亡くなった土佐藩主山内豊昌の国元への移送かと思われます。また、元禄十六年十月十七日の「松平縫殿頭様御遺骸」には、「於大坂御病死被遊、三州奥殿村へ御入ニ付」とあり、大給松平乗成が大坂定番勤務中に亡くなり遺骸が奥殿（現岡崎市）に送られたものとみられます。両方の記述には「御泊」とあるので本陣内に一晩安置されたものとみられます。なお、元禄十三年十月十八日の「松平大炊頭様御尊骸」は「深溝本光寺へ御光入」とあり、島原藩主松平忠房の遺骸の移送とみられます。深溝松平氏は亡くなると先祖墳墓の地である深溝（現幸田町）の本光寺に葬られるのが慣例でした。ただ、こちらの方は「御泊」ではなく、「参上仕候」とあるので通過したのだと思われます。

本冊は本陣永田清兵衛の記録ですが、本陣利用が差し合い、つまり重複した場合の対処として、一方を十右衛門方に廻している記述がいくつかみられます。たとえば、元禄十五年の五月六日は、大和国柳本藩主織田秀親と長門国清末藩主毛利匡広の「御休」が重複したために、織田監物を十右衛門方に廻しています。元禄十七年五月二十二日の小笠原真方の宿泊に関する記述では十右衛門は脇本陣とされています。

本陣の利用者は大名や幕臣、公家などに限られますが、その利用形態を記した宿帳からは、近世社会の交通の一端を垣間見ることができるのです。

（近世部会　調査執筆委員　堀江登志実）

知立市域に遺る祭礼道具から

隔年に開催される「知立まつり」（五月二日・三日）の本祭は、知立市域で最も伝統ある祭礼です。そこで繰り広げられる五輌の山車行事は、日本を代表する山・鉾・屋台行事の祭りとして平成二十八年、ユネスコの無形文化遺産に登録されました。これは周知のように旧東海道池鯉鮒宿の氏神「知立神社」祭礼として、刈谷城下と交替で本祭を行なってきた伝統が今に続くものです。

知立神社には鎌倉時代の製作と考えられる獅子頭が宝物として伝えられています。それは神輿渡御に加わったと考えられ、舞楽面などとともに中世からの伝統を受け継ぐものです。ところで知立まつり山車五輌のうち、刈谷道と称された宝町では、長いこと獅子舞を受け持っていました。そのときにはほかの四か町の山車とともに、獅子頭を安置する獅子屋形で祭りに参加したのです。その屋形の存在は不明でしたが、宝蔵寺（宝町）に安置される弘法大師の厨子となった可能性の強いことが明らかになりました。

宝町の獅子舞は、獅子頭を着けた者が主に女形となり、歌舞伎芝居を演じた芸能です。それは東別所村（現安城市）の大神楽から各地に伝わりました。ところで、明治時代の記録によると、上重原・谷田・八橋などの祭礼でも同様な獅子舞を演じていました。それぞれの芸自慢の人達が遊芸鑑札（遊芸を行う許可証）を取得したのです。既に西中町の獅子屋形は『新編知立市史　別巻　文化財編』で紹介しましたが、ほかに八橋町にも同様な屋形が遺されており、これらの資料から市域でも以前は盛んに獅子舞が行われていたことを物語っています。

豪華な馬具で馬を飾り社寺へ献馬する行事も盛んでした。市域の祭りでも馬は大いに活躍しました。特に上重原では古く知立神社祭礼で神馬献納を堤（現豊田市）とともに担当したほどです。これまで市域において飾り馬具の存在は確認できませんでしたが、八橋町の日吉山王社から標具巻・障泥・尻駄負など四頭分余りが出現しました（写真①）。

写真①（尻駄負）

写真②（人形首）

さらに年中行事にかかわる遺品が谷田町の郷倉に遺されていました。それは小さな人形首（頭）一五個余りで、雛人形の首同様な木屎造の物です（写真②）。その由来は定かではありませんが、同地では七夕のときに額飾りが造られ、そこへ武者人形を飾ったといわれていますので、その飾り人形に用いられた首だろうと推定できます。男の人形首が多いことからも先のことを裏付けています。

このように市史の調査から、知立市域でも旧東海道の池鯉鮒宿の町場だけでなく、周辺の地域でも豊富な祭礼文化を展開していたことが、新たに見いだされた祭礼道具から甦ってきます。

（民俗部会　部会長　鬼頭秀明）

活動記録

（平成29年9月1日～30年8月31日）

編さん委員会

30年8／10

編集委員会

29年10／29
30年1／27、4／15、7／1

各部会からの活動報告や、通史編の体裁などを決めています。

部会

考古部会

29年9／23
30年1／20、5／18（打ち合わせ）、6／24

通史編に向けて、内容や掲載する図版を考案しています。

古代・中世部会

29年10／29
30年1／27、4／15、5／18（打ち合わせ）、7／6

通史編に向けて、内容や掲載する図版を考案しています。

近世部会

29年10／8、12／3
30年1／6、6／30、7／1（打ち合わせ）

資料調査

29年9／9（西尾市）、11／16（刈谷市）、12／27（刈谷市）

29年度に資料編を刊行し、通史編に向けて、内容を考案しています。

近代・現代部会

29年9／2、12／9
30年4／14、6／3、7／1

資料調査

29年9／2（在原寺）、9／23（刈谷市）、12／9（刈谷市）
30年1／21（八ツ田町）、3／21（刈谷市）、6／23（刈谷市）、7／15（刈谷市）、7／28（刈谷市）、8／5（刈谷市）、8／17（立川市）、8／19（刈谷市）

資料調査や資料編の再確認を行い、通史編に向けて、内容を考案しています。

民俗部会

29年9／21
30年5／24、7／4

調査・聞き取り

29年9／10（御拓地大明神祭礼）、9／24（秋葉まつり）、9／27（個人）、10／10（知立神社）、10／26（長篠町）、11／14（山屋敷町）
30年1／12（谷田町）、1／24（順誓寺・八橋町）、3／18（個人）、5／3（知立まつり）、5／10（日吉山王社）、5／13（日吉山王社祭礼）、6／13（西丘町）、7月・8月（秋葉まつり関係）

30年度刊行に向けて、原稿の執筆・校正作業を行っています。

自然部会

30年1／13

29年度に資料編を刊行しました。

八橋グループ

29年9／16
30年3／24、6／23、8／24（打ち合わせ）

資料調査

29年11／9（豊中市）
30年1／11（豊橋市）、2／1（豊橋市）、2／9（京都市）、3／8（西尾市）、3／16（大阪市）

八橋に関する資料の調査・収集を進め、原稿を執筆しています。

お礼

市史編さん活動におきまして、様々な方々にご協力・ご教示を賜りました。心よりお礼申し上げます。

好評販売中

■新刊

『新編知立市史4　資料編　近世』
B5判（CD―ROM付き）　三一〇〇円

『新編知立市史8　資料編　自然』
B5判オールカラー（『植物・動物目録』付き）　四七〇〇円

■既刊

『新編知立市史3　資料編　原始・古代・中世』
B5判二冊箱入り（付図有り）　四五〇〇円

『新編知立市史5　池鯉鮒宿本陣御宿帳』
B5判　二六〇〇円

『新編知立市史6　資料編　近代・現代』
B5判（付図有り）　四一〇〇円

『新編知立市史　別巻　文化財編』
A4判オールカラー　二六〇〇円

『新編知立市史』は、市役所市民課の窓口または歴史民俗資料館でお買い求めいただけます。
郵送（送料別）もできますので、詳しくは知立市ホームページの、**「組織から探す」→「文化課」→「知立市歴史民俗資料館」→「刊行物案内」**のページをご覧ください。

刊行予定

『新編知立市史7　資料編　民俗』
平成三十一年三月刊行（予定）
B5判五〇〇ページ　三七〇〇円（予定）

本巻は、何年にもわたって行った市民の方からの聞き取り調査や、市域の祭礼調査などに基づいた内容となっており、社会生活、生業、衣食住、人の一生、年中行事、信仰、祭りと芸能という各テーマで構成されています。

知立まつりをはじめ、現在では失われつつある習慣や人々の昔の暮らしの様子、民俗芸能などについて知ることのできる一冊となっています。

お問い合わせ

知立市教育委員会文化課市史編さん係
〒四七二―〇〇五三
知立市南新地二丁目三―三（歴史民俗資料館内）
TEL　〇五六六―八三―六七八九
FAX　〇五六六―八三―六六七五
E-mail　sisi-hensan@city.chiryu.lg.jp
ホームページもご覧ください
「新編知立市史編さん」で検索

新編知立市史だより第九号　平成30年10月16日発行
発行　知立市教育委員会文化課市史編さん係